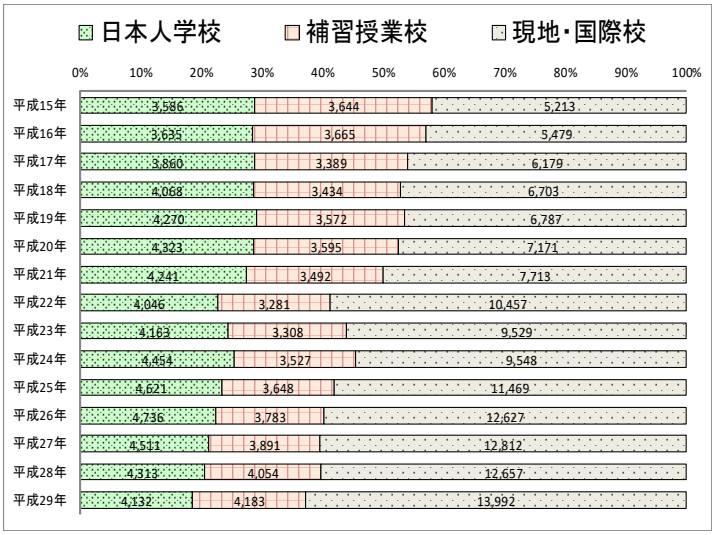
グローバル人材育成に向けての帰国生徒教育
－特性の伸長・活用を促すことを通して－（４年次）

Ⅰ　主題設定の理由

近年のグローバル化に伴い，日本企業の海外進出が更に進んでいるだけでなく，海外からも多くの企業が日本に進出してきている。このような状況の中で，文部科学省は，国際的な産業競争力の向上や，国と国の絆の強化の基盤として，国境を問わず積極的に挑戦し活躍できる人材の育成，つまりグローバル人材の育成が求められていると述べている。そして，グローバル人材の育成に求められる要素として「語学力のみならず，相互理解や価値創造力，社会貢献意識など様々な要素が想定される」と述べている。このことから，このような社会を生き抜くためには，語学力だけでなく，互いを理解し合いながら，状況に合わせて，それぞれのよさを取り入れたり，組み合わせたりして，新しい価値を創造し，社会に貢献する人材を育んでいくことが必要となってくると考える。

外務省の海外在留邦人数調査統計（平成30年要約版）によると，海外で生活する義務教育段階の日本人児童生徒数は，平成28年の７万９千人から増え，平成29年では，８万２千人を超えた。また，中学生子女数の推移では，表１にあるように，現地・国際校に通う生徒が増えている。このことから，今後，帰国する生徒の中には，その国の言語を学ぶだけでなく，その国のものの見方や考え方に触れ，帰国する生徒がさらに多くなってくることが予想される。



【表１　中学生子女数（長期滞在者）推移】

我が国の帰国生徒教育は，学校生活への「適応教育」に始まり，帰国生徒の個性の「保持・伸長教育」や海外における学習・生活体験を尊重した「異文化教育・国際理解教育」へ，さらには帰国生徒と一般生徒との「相互交流学習」とその重点を移行させてきた。そして，総務省は「グローバル人材育成に資する海外子女・帰国子女等教育に関する実態調査結果報告書」（平成27年８月）において，帰国生徒の特性の伸長・活用に配慮した教育の在り方について検討する必要があると述べている。

以上のことから，帰国生徒の適応教育を始めとした今までの教育に留まらず，帰国生徒の特性[注1)]を伸長・活用させる教育に取り組み，よりよい社会を築くためのグローバル人材を育んでいく必要があると考える。

そのような中，本校は，1980年，中部地方初の帰国子女学級を開設し，40年間に渡って帰国生徒教育を実施してきている。開設当初は，帰国生徒の海外生活に起因する学習の遅れを取り戻させ，生活習慣の違いに順応させるという適応教育からスタートした。その中で，海外で身に付けた特性の保持・伸長を図ることや一般生徒との相互交流活動（教科の授業，道徳，総合的な学習

の時間，学級活動，学校行事）を通して，様々なものの見方や考え方を理解させることにも取り組んできた。前研究シリーズでは，「個々のアイデンティティ形成を目指す帰国生徒教育－多様なエスニシティ[注2)]を基盤として－」を主題として，「帰国生徒カルテ」を用いて，個々の帰国生徒の状況を踏まえて，「適応教育」「特性の伸長・活用」「相互交流学習」を調和的に行いながら，個々の生徒に日本の学校，社会に対するエスニシティを育み，帰国生徒のアイデンティティを形成する必要があると考えて取り組んできた。この研究の成果として，「帰国生徒カルテ」に基づいて個に応じた理解支援・表現支援を行ったことが，一人一人の適応状況を細かく捉えることになり，生徒の学習面や態度面の成長を促すことにつながった。また，自分と異なるものの見方や考え方を知ろうとする姿や，自分のものの見方や考え方を表出し，相手に伝えようとする姿が多くの生徒に見られ，帰属できる集団を増やし，帰国生徒としてのアイデンティティの形成につながったと考える。一方課題として，適応を意識するあまり，自分の意思と反して周りの雰囲気に流されて行動してしまう生徒の姿があり，自分の考えや，仲間の考えの良さを大切にしながらも，新たな価値を創造し，今生活している環境をよりよくしていこうとする姿が見られない場面があった。これらのことから，前研究シリーズでは「相互交流学習」を通して，「適応教育」を促すという点においては成果があったものの，特性を伸長・活用することについて十分でなかったことが課題であると考える。

そこで，今研究シリーズでは「特性の伸長・活用」に再度着目する。そして，「特性の伸長・活用」を促すことで，新たな価値を創造し，今生活している環境をよりよくしていこうとする生徒を育てていく。また，適応面だけでなく，特性の伸長・活用面も把握することができるようにするために，「帰国生徒カルテ」を改変し，「帰国生徒ライフブック」（資料１参照）を用いて，個々の帰国生徒の適応状況や特性を捉えていく。

以上のことから，研究主題を「グローバル人材育成に向けての帰国生徒教育－特性の伸長・活用を促すことを通して－」と設定し研究を進めることとした。

Ⅱ　研究の概要

１　目指す生徒像

グローバル社会を生き抜くために，特性の伸長・活用を図り，新しい価値を創造する生徒

特性の伸長・活用を図り，新しい価値を創造する生徒とは，様々な問題に直面したときに，特性を表出し，その状況にあったよりよい解決方法を生み出す中で，特性の長所と短所を再認識する生徒である。まず，在留国で学んだことは何かを想起し，自分はどのような価値観で，どのように行動するかを具体的な言葉や文章で伝えることが特性を表出することにつながると考える。次に，それぞれの価値観や，それに基づく解決方法を全体で共有し，目的に合わせて優先順位を考えたり組み合わせたりし，その上で，解決に向けどのように行動するのかを考えることが，その状況にあったよりよい解決方法を生み出すことにつながると考える。最後に，実際に行動し，考えた解決方法がふさわしいものだったかを，振り返り，改善を繰り返していくことで，自分の特性の長所と短所を考えることになり，このことを積み重ねていくことで，新たな価値を創造することにつながると考える。なお，ここで使う言語については，日本語に限らず在留国で学んだ言語も状況に合わせて

選択していくものとする。

2　育みたい資質・能力

目指す生徒像を達成するためには，次のような資質・能力を育んでいく必要があると考える。

○　特性を表出することができる力 ○　それぞれの立場を尊重し，自分とは異なる特性を認識する態度 ○　自他の特性を基に生み出した解決方法を振り返りながら，新たな価値を創造する力

まず，特性を表出するためには，在留国で学んだことは何かを想起し，自分はどのような価値観で，どのように行動するかを具体的な言葉や文章で伝えることが大切である。次に，それぞれの立場を尊重し，自分とは異なる特性を認識するためには，互いの考えを聞き，意見を述べ合いながら，各々の価値観を知ることが必要である。そして，自他の特性を基に生み出した解決方法を振り返りながら，新たな価値を創造するためには，目的に合わせて価値観の優先順位を考え，その上で，様々な解決方法のよさを考えたり，組み合わせたりしてよりよい解決方法を生み出すことが必要である。そして，実際に行動し，考えた解決方法がふさわしいものだったかを，振り返り，改善を繰り返していくことで，自分の特性の長所と短所を再認識することになり，この積み重ねが，新たな価値の創造につながると考える。なお，帰国生徒の適応状況や特性は様々であるため，一人一人を把握することが必要である。

3　資質・能力を育むための手立て

資質・能力を育むために，活動の流れの中に「把握する場」「実践をする場」「振り返る場」というの三つの場を設定する。

「把握する場」では，まず，探究テーマを生徒に提示する。生徒がそのテーマに対して，在留国で学んだことは何かを想起し，自分はどのような価値観で，どのように行動するかを具体的な言葉や文章で伝えさせる。それにより，自己の特性を表出することができるようになると考える。そして，伝えさせた後には，生徒に自分の意見を述べ合いながら，それぞれの価値観を知るようにさせる。そうすることで，自分とは異なる特性を認識することができるようになると考える。

「実践をする場」では，自分の意見を発表させる。発表後，一人一人がどのような価値観をもち，どのように行動しようとしているのかを考えさせ，価値観を共有し，目的に合わせて優先順位を考えさせたり，組み合わせたりさせる。その後，探究テーマを解決するために，どのように行動するのがよりよい解決方法につながるのかを考えさせる。そのために，「なぜ」といった視点で，一つ一つの解決方法のよさを考えたり，様々な解決方法を組み合わせたりしてよりよい解決方法を考える。そうすることで，実際に行動する際に，何を大切にして行動しているのかを常に意識しながら取り組むことができると考える。

「振り返る場」では，実際に行動した結果，考えた解決方法がふさわしいものだったかを，個々に振り返らせる。そのために，探究テーマの解決に向けて実際に行動して感じたことと，そこで気付いた自分の特性の長所と短所を文章で書かせる。そうすることで，探究テーマを解決する上で，何が大切だったのかを振り返ると共に，自分の特性の長所と短所を再認識することになり，これらのことを積み重ねていくことで，新たな価値を創造することができると考える。また，今後の生活にいかせるようにするために，次はどのような目標にするかも書かせる。そうすることで，次の取組に向けて，改善をし続けながら，意識を高くもって取り組むことができるようになると考える。

4　資質・能力が育まれたかの評価について

それぞれの資質・能力が育まれたかどうかについて，授業プリントや振り返りのプリントの記述を基に，以下の評価指標を用いて判断をする。

特性を表出することができる力	２：在留国での経験を基に，探究テーマをどのように解決するかを文章や言葉で表現することができている。 １：在留国での経験を，文章や言葉で表現することができている。
それぞれの立場を尊重し，自分とは異なる特性を認識する態度	２：他者の意見を聞いて，自分とは異なる特性について，自分の特性の長所と短所に目を向けて考えている。 １：他者の意見を聞いて，自分とは異なる特性について考えている。
自他の特性を基に生み出した解決方法を振り返りながら，新たな価値を創造する力	２：特性の長所と短所を踏まえ，今後の生活にどのようにいかしていくか具体的に書くことができている。 １：特性の長所と短所について書くことができている。

５　研究の経緯

(1)　研究計画

年　次	研　　究　　内　　容
１年次	・帰国生徒教育研究理論の確立 ・特性の伸長・活用を図る授業（英語科）の提案 ・「帰国生徒ライフブック」を踏まえた授業（英語科）の提案
２年次	・帰国生徒教育研究理論の見直し ・特性の伸長・活用を促す取組（道徳科）の提案
３年次	・帰国生徒教育研究理論の確立 ・特性の伸長・活用を促す取組（道徳科）の提案
４年次	・研究のまとめ

(2)　１年次の成果と課題及び２年次の取組

１年次においては，理論の構築と目指す生徒像を達成するために，「特性の伸長・活用」に焦点を置き，それぞれの資質・能力を育むために，英語科の授業を行った。「帰国生徒ライフブック」のプロフィール表の記述を主な手立てとして，在留年数，在留地，在留地で用いた言語や在留地での生活の様子を把握し，表現支援と理解支援を行った。その結果，その場に応じて自分が表出できる言語を選択し，自分のものの見方や考え方を適切に表出し，他者に伝えることができた。また，話合いの中で生徒同士が関わりながら自分の考えを表出することができた。そして，相手の考えに対して頷いて認める姿が見られたり，自分とは異なる見方や考え方に対して，相手の考えを尊重しながら，自分の考えを伝えたりすることができる生徒が増えた。しかし，全ての教科において，その場に適した言語を選択し，表現支援と理解支援を行うことはできず，限られた教科のみでの取組になってしまった。このことから，言語面での伸長・活用に着目するだけではなく，帰国生徒のものの見方や考え方といった視点に着目し特性の枠組みを広げて取り組む必要があると考える。そうすることで，教科の枠組みを超えて，あらゆる場面で特性をいかして活動することができるようになり，グローバル人材を育む帰国生徒教育を発展させることができると考える。

⑶　２年次の成果と課題及び３年次の取組

２年次においては，教科の枠を越えて様々な活動において特性の伸長・活用が図れるような取組を行った。特に，道徳科の実践では，自分の特性は何かを課題ごとに想起し，それを他者に伝えたり，自分の考えとは違う意見に対して，その考えのよさを認め，受け入れたりする生徒の様子が見られた。また，課題に対しての解決策を考える際には，互いの特性をいかした解決方法のよさを認め合いながら，新たな解決方法を考える生徒の様子が見られた。これらのことから，目の前の課題に対して，自他の特性をいかし，課題を解決しようとする生徒の成長を見ることができた。しかし，今回の学習が他の場面でどのようにいかすことができるかについての記述については，曖昧な記述が多く，学んだことを積み重ねて，新たな価値の創造をする生徒の姿という点において課題があると考える。そこで，学習後の振り返りの仕方について，何を学んだのかだけでなく，学んだことが実際にどのような場面で活用できそうかを聞いたり，記述させたりする。そうすることで，特性をいかして活動することができる場面を関連付けることができるようになり，様々な活動で特性を表出し，他者と認め合いながら，新たな価値を創造するといった，グローバル人材を育む帰国生徒教育を充実させることができると考える。

⑷　３年次の成果と課題及び４年次の取組

３年次においては，様々な場面での振り返りを充実させることで，新たな価値を創造することができるような取組を行った。特に，道徳科の実践では，探究テーマに対し，それぞれの在留国での経験を想起しながら，自分の特性を表出したり，自分とは異なる特性を認識したり，それらの長所と短所を踏まえて，新たな価値を創造する姿が見られた。そして，１週間後に行った振り返りからは，学級で過ごす際や，委員会活動の際に，道徳科で創造した新たな価値を踏まえて活動していたことが分かった。また，学校祭や合唱祭などの活動を終えるごとに記述した振り返りからは，互いのよさを認め合い，次の活動にいかそうとする姿が見られた。これらのことから，多くの生徒が特性をいかして活動することができる場面を関連付けることができた。しかし，一部の生徒においては，自分とは異なる特性に出会った際に，それを受け入れることのみを重視する姿が見られた。そこで，引き続き定期的な振り返りをさせるとともに，自分の特性を表出することにつながるような振り返りの方法を探ることが必要であると考える。そうすることで，全ての生徒が特性をいかして活動することができる場面を関連付けることができるようになり，様々な活動で特性を表出し，他者と認め合いながら新たな価値を創造する生徒の育成につながると考える。

６　４年次のねらい

４年次では，３年次までの成果と課題を踏まえて，研究のまとめをしていく。その中で，活動の流れの中に三つの場を設定することが，資質・能力を育むための手立てとして有効であったかを検証する。

注１）帰国生徒の「特性」とは，在留国で身に付けた語学力や海外で身に付けた自分のものの見方や考え方である。また，海外生活によって身に付けた異文化に関する知識・生活様式・行動様式も特性に含まれるものとする。

注２）エスニシティとは，1970年代アメリカ合衆国社会科学において使われ始めた言葉であり，文化的背景に共通点をもつ集団への帰属意識のことである。前研究では「エスニシティを育む」とは，一方的に日本の学校，社会の価値観を押しつけるのでは

なく，帰国生徒学級に在籍し，帰国生徒としての特性を保持したまま，帰属できる集団を徐々に増やしていく考えであると定義して研究を進めた。

引用文献

１）外務省『海外在留邦人数調査統計』平成30年要約版

参考文献

お茶の水女子大学附属小学校『開設25周年　帰国児童教育実際指導研究会研究紀要「ともに学びを創造する」』
お茶の水女子大学附属中学校『第５回　帰国子女教育研究協議会　帰国子女教育学級創設25周年「個の自立を支え，相互啓発の学びを促す」－多文化教育の視点で学校教育を見直す－』
河原俊昭，山本忠行，野山広編・著『日本語が話せないお友だちを迎えて』くろしお出版（2010）
海外子女教育振興財団『帰国児童生徒受入れ校に関する情報について』〈http://www.joes.or.jp/g-kokunai/index.html〉（参照2014年８月20日）
窪田佳尚代表『異文化との共生をめざす教育－帰国子女教育研究プロジェクト最終報告書－』三友社（2001）
佐藤郡衛『転換期にたつ帰国子女教育』多賀出版（1995）
佐藤郡衛『国際化と教育－異文化間教育学の視点から－』財団法人　放送大学教育振興会（2003）
佐藤郡衛『国際理解教育』明石書店（2001）
佐藤郡衛『異文化間教育　文化間移動と子どもの教育』明石書店（2010）
文部科学省『施策の概要』〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001.htm〉（参照2012年４月２日）
文部科学省『JSLﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ』〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/011.htm〉（参照2012年４月２日）
文部科学省『海外で学ぶ日本の子どもたち』〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/001.htm〉（参照2015年12月18日）
文部科学省『日本再興戦略』改定2015－未来への投資・生産性革命－〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001.htm〉（参照2015年６月30日）
外務省『グローバル人材育成に資する海外子女・帰国子女等教育に関する実態調査結果に基づく勧告』(http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000260877.xlsx)　（参照2015年８月）
外務省『海外在留邦人数調査統計』平成29年要約版（http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000260884.pdf）（参照2016年10月１日）
日本国際理解教育学会編著『国際理解教育ハンドブックーグローバル・シティズンシップを育むー』明石書店（2015）
川上郁雄『「移動する子どもたち」のことばの教育学』くろしお出版（2016）
京都教育大学附属桃山中学校研究紀要『グローバル人材育成につながる帰国・外国人生徒教育の創造』京都教育大学附属桃山中学校（2016）

資料1

帰国生徒ライフブック

秘

NO.1　（プロフィール表）　　初期作成　　年　月　日 作成

ふりがな		0年E組0番		学　級		在留年数
氏　名		性別		1年担任		～
				2年担任		
				3年担任		
在留地				学校名		
入学前の情報						

NO.2　（生活適応支援）

小4年・中1年	はじめの様子	
	支援の手だて	
	1年末 2年初 (編入時) の様子	
小5年・中2年	支援の手だて	
	2年末 3年初 (編入時) の様子	
小6年・中3年	支援の手だて	
	3年末の様子	

NO.3　（適応評価）

（とても当てはまる…5，だいたい当てはまる…4，ふつう…3，あまり当てはまらない…2，まったく当てはまらない…1）

項　　目	1年	2年	3年
E組の中での人間関係が良好である。			
学校生活でのルールやマナーが身についている。			
一般学級との交流に前向きである。			
一般学級の子どもと人間関係を築くことができている。			
学校の活動に積極的である。			
在留地で身につけた言語の伸長・活用への態度			
生活において，話す，聞く，書く，で困らない。			

資料1

氏　名		性別		学級	0年E組0番	在留年数	
はげみ 学力補充 の状況							

NO.4　（学習適応支援）

国語	1年	
	2年	
	3年	
社会	1年	
	2年	
	3年	
数学	1年	
	2年	
	3年	
理科	1年	
	2年	
	3年	
音楽	1年	
	2年	
	3年	
美術	1年	
	2年	
	3年	
保健体育	1年	
	2年	
	3年	
技術家庭	1年	
	2年	
	3年	
英語	1年	
	2年	
	3年	